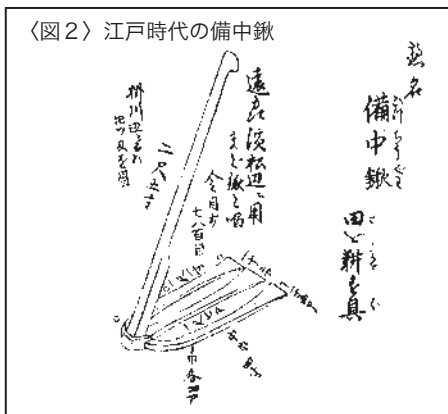
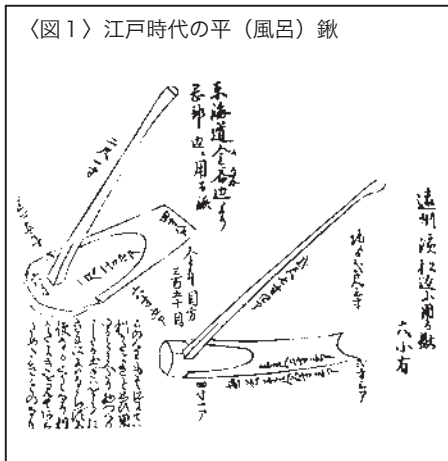


32 農業ジャーナリスト大蔵永常と遠州

～『農具便利論』と『広益国産考』～

1 三里はなれば、ちがう鋤

〈図1〉と〈図2〉は、江戸時代に使われた諸国の鋤の一部である。「鋤は国々にて三里を隔てずして違ふものなり」(『農具便利論』)。これは、19世紀後半に活躍した農学者大蔵永常のこゝばである。この書では、永常が旅先で見た30余種の鋤が紹介されている。〈図1〉は「平(風呂)鋤」、〈図2〉は経済発展にわく17世紀後半から広まったといわれる「備中鋤」である。この鋤は、フォーク状なので田畑をより深く掘り起こす農具として利用された。〈図2〉の備中鋤(700~800目)が〈図1〉の平鋤(350目)より2倍の重さなのもそのためである(1目は約3.75g)。



大蔵永常『農具便利論』上巻「日本農書全集15巻」(農山漁村文化協会)より

鋤は、村の鍛冶屋が先端に出雲の「玉鋼」を加工した硬い鋼をつけることで、精度や耐久性がより高まっていた。鋤がこのような多様なのは、地域の農民たちがそれぞれの土質や栽培作物にあった鋤を鍛冶屋に注文したからである。永常は、『農具便利論』で農具のすべてに刃や柄の寸法、重さを入れている。他域の鋤でも、実用性が高い場合には鍛冶屋につくってもらえるからだ。例外的に〈図1〉の「東海道金谷辺より岡部辺に用る鋤」では、「…作物を植える土ぎわを見ると、きれいにはなっていない不便な鋤」とコメントし、改良の必要性を説いている。

ほぼ同じ時期に書かれた『除蝗録』では、イネの害虫イナゴの発生で大きな被害を受けた大井川のほとりの地では、菜種油でなく鯨油の方が防虫効果があると説く。著者の大蔵永常は、1768(明和5)年生まれ、父は豊後国日田(大分県)のろう作り職人で、日田を出たのち、各地をめぐり、先進地域の農業技術を後進地に伝えるべく、生涯で33部79巻の著作を出版するなど“農業ジャーナリスト”として活躍した。一方で、その学識を買われ農政家(農業アドバイザー)として用いられた。

2 顕微鏡でみた花粉

永常の農学は合理的、科学的な考えに貫かれていた。例えば、18世紀には代表的な商品作物だった綿づくりに関する著者『綿圃要務』(1834(天保4)年刊行)では、ルーペでなく、顕微鏡で雄しべ雌しべをスケッチした図を載せている。それらに無数に付着する花粉を「まるでコンペイトウのようだ」と書いている。顕微鏡はオランダ人により伝えられ、19世紀初頭には実用化

された。人体寄生虫を顕微鏡で観察した蘭医もいたほどである。こうした永常の蘭学への関心は、同じ学問をこころざす田原藩（愛知県田原市）家老渡辺華山の知るところとなり、彼の推薦で藩の興産方に任命されることになる。1834年、永常67歳の時である。

永常の農学は以前から、米以外のその地に合った売れ筋の特産物をつくることで農民を豊かにすることを理想とした。およそ1世紀前に活躍した宮崎安貞が米を対象とした農学をこころざしたのとは対照的である。これは1世紀の間に国内で、商品経済が発展したと考えた方がよいだろう。

田原藩での永常の実践は、実を結ばないまま終わる。最も大きな理由は、推薦者渡辺華山が投獄されたためである。華山はアメリカ船モリソン号に砲撃を命じた幕府に対し、蘭学者グループの一人として批判をしたため、1839年、永蟄居（終身の謹慎）を命じられる。その年、永常も野良犬のように田原から追放された。

3 舞坂海苔は3000両

その後永常は、三河の岡崎に落ち着いたものの、2年9か月余り困窮のどん底にあった。病気の妻と未婚の娘をかかえて収入が全くなかったからである。永常は、1842（天保13）年、75歳で浜松藩に興産方として用いられる。作物の苗木を植えるため300坪の屋敷を与えられ、娘に養子を迎え、妻の病気も小康状態となるなど、生活は安定した。この時期に、『農具便利論』とならぶ彼の代表作『広益国産考』が執筆され始め、1・2巻の完成をみた。

この書は、商品作物60種ほどの栽培・加工法を示し、農民に現金収入への道を説く永常農学の代表作といわれる。また、永常が浜松在住ということもあり、遠州地方の特産物がいくつか紹介され、このなかには現在も生産されているものもある。

白砂糖は多くつくられ江戸に出荷されるが、製法が悪いためすぐ赤みをおびてしまう。また、遠江でつくられ、江戸にも出荷された「ゆこう」（ユズとミカンの中間の大きさ）について、香りは良いが味が今ひとつであると批評している。逆に、掛川の「葛布」は袴地や夏合羽に使われ、優秀な品質と称賛する。同じように遠州の綿織物「棧留縞」（浜松市東区笠井周辺の笠井縞）が、尾張の結城縞とともに諸国からの注文が増え大きな利益をもたらしていると述べる。舞坂では伐採した木を遠浅の海にさし、ノリを養殖して年間3,000両（1両10万円とすると3億円ほど）もの収入を得ている、と書いている。

大蔵永常は3年ほどの浜松在住の後、藩主水野忠邦が天保の改革に失敗したことや妻が亡くなったこともあり、1846（弘化3）年江戸に出て、『広益国産考』8巻の完成をめざした。その巻頭で永常は「一国を豊かにするための方法は、まず人民の生活を豊かにして、その結果として領主の利益になるよう計画すべきである」と述べている。その後江戸で、87歳で長寿の祝いを仲間が行うが、以降の詳細は不明である。そして、彼の死後、1859（安政6）年に『広益国産考』は完成・刊行された。

〈参考文献〉

飯沼次郎編『近世農書に学ぶ』（NHKブックス）

『日本農書全集 14 広益国産考（大蔵永常）』（農山漁村文化協会）

『日本農書全集 15 除蝗録ほか（大蔵永常）』（農山漁村文化協会）